



歴史学

たなか あきら
田中 彰

下松市
(1928～2011)



【著作】

『明治維新政治史研究』（昭和38・青木書店）
『幕末維新史の研究』（平成8・吉川弘文館）
『岩倉使節団の歴史的研究』（平成14・岩波書店）

ほか

昭和三年（一九二八）三月、山口県都濃郡末武南村（現・下松市）に生まれる。山口県立徳山中学校を卒業し、陸軍予科士官学校に入校。陸軍士官学校の時、昭和二十年（一九四五）八月十五日の終戦を迎えた。この敗戦体験が、「その後の私の人生観・歴史観の原点になった」と語っている。

陸軍士官学校解散後、郷里に帰り、徳山市立第三中学校に勤務した。歴史学に関心を持ち、昭和二十四年（一九四九）東京教育大学文学部史学科入学。さらに大学院に進学した。この間、社会経済史学会の昭和三十一年（一九五六）大会で、共通論題「藩政改革と明治維新」の山口藩を報告するなど、明治維新研究者として活躍を始め、藩政文書を用いて実証的に分析する新しい研究を切り開いた。

昭和三十七年（一九六二）都留文科大学助教授となる。昭和三十八年（一九六三）、それまでの研究をまとめ、『明治維新政治史研究』（青木書店）を刊行した。本書は、三十五歳の時の著作で、討幕派の形成過程を詳細に解明して、その後の学界に多大な影響を与えた。

昭和四十年（一九六五）北海道大学文学部助教授となり、昭和四十七年（一九七二）同大学教授。昭和四十九年（一九七四）から翌年まで米国ハーバード大学東アジア研究センターへ招聘され、その機会に『米欧回覧実記』の研究に携わり、岩倉使節団の回覧したあとを追跡調査した。また、インドネシア大学に滞在中には東南アジアの土地になじみ、現地を踏む研究の重要性を身をもって実践した。これらは、『米欧回覧実記』（岩波文庫全五巻）の校注に結実した。この中で、岩倉使節団が、米欧の「大国」もさることながら、「小国」に深い関心を持って洞察を試みていたことを解明した。「小国主義」の視点は、「大国主義」となっていた終戦を迎えざるをえなかった日本近代史を批判する視座となり、敗戦を研究の原点とし、平和と不戦を訴える歴史観につながっている。

平成三年（一九九一）北海道大学を退官、札幌学院大学経済学部教授となり、平成十一年（一九九九）まで勤めた。平成四年（一九九二）、山口県史編さん事業が発足すると、副会長として編さんを軌道に乗せるのに尽力した。平成十九年（二〇〇七）、体調に配慮する必要から勇退した。平成二十三年（二〇一一）十一月九日、逝去。

（文・三宅紹宣）



著書



『山口県史 史料編 幕末維新』（全7巻）

序章 維新変革の政治的主体の形成過程をめぐって

明治維新は、幕藩体制の構造的矛盾による解体への必然性と、十九世紀後半における先進資本主義列強による、外圧という世界的規定性との、結節点としての歴史変革の過程である。その歴史過程を経て、明治天皇制国家は創出され、聳立する。

本書は、この明治維新によって創出された国家権力の特質を明らかにするひとつの手がかりをうる方法として、維新変革の政治的主体がいかにして形成され、いかなる性格をもっていたか、という点に分析の視点を置いて若干の考察を試みようとするものである。

今、ここでいう維新変革の政治的主体の形成過程を、これまでの政治史研究の成果の上に立っていえば、藩政改革派―尊攘派―討幕派―維新官僚と名づけられる政治勢力の形成・転回の過程として表現されるだろう。それは、幕藩体制の基本的階級関係の矛盾の上に、新たに加わる外圧の中で、それぞれの時点の矛盾の主要な側面の推移に応じて、権力をめぐって対抗する諸勢力の政治的展開の諸局面を通じて、しだいに維新変革の主導権を握っていく政治的指導勢力の形成・転回の過程なのである。（後略）

（『明治維新政治史研究』（青木書店）、序章、より）

田中 彰 年譜

昭和3（一九二八）	一六歳
昭和19（一九四四）	一七歳
昭和20（一九四五）	一八歳
昭和22（一九四七）	二〇歳
昭和23（一九四八）	二一歳
昭和24（一九四九）	二二歳
昭和28（一九五三）	二五歳
昭和31（一九五五）	二八歳
昭和34（一九五九）	三一歳
昭和37（一九六二）	三四歳
昭和38（一九六三）	三五歳
昭和40（一九六五）	三七歳
昭和43（一九六八）	四〇歳
昭和47（一九七二）	四四歳
昭和49（一九七四）	四六歳
昭和55（一九八〇）	五二歳
昭和56（一九八二）	五三歳
昭和60（一九八五）	五七歳
昭和61（一九八六）	五八歳
昭和62（一九八七）	五九歳
昭和63（一九八八）	六〇歳
平成3（一九九二）	六三歳
平成4（一九九二）	六四歳
平成6（一九九四）	六六歳
平成8（一九九六）	六八歳
平成10（一九九八）	七〇歳
平成11（一九九九）	七歳
平成14（二〇〇二）	七四歳
平成15（二〇〇三）	七五歳
平成16（二〇〇四）	七六歳
平成23（二〇一一）	八三歳

（提供・三宅紹宣）

3月20日、山口県都濃郡末武南村（現下松市）に生まれる。山口県立徳山中学校4年修了。陸軍予科士官学校入校。将校生徒となる。

陸軍士官学校入校。士官候補生となる。終戦。

徳山市立第三中学校勤務。

東京高等師範学校入学。

東京教育大学文学部史学科入学。

東京教育大学文学部史学科卒業。

東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了。

東京教育大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。

都留市立都留文科大学助教授。

『明治維新政治史研究』（青木書店）刊行。

北海道大学文学部助教授。

『幕末の長州』（中公新書）、『幕末の藩政改革』（塙選書、塙書房）刊行。

『未完の明治維新』（三省堂選書）刊行。

北海道大学文学部教授。

4月、米国ハーバード大学東アジア研究センターへ招聘（客員研究員、昭和50年7月）

8月、インドネシア大学文学部客員教授。（昭和56年7月）

『明治維新の敗者と勝者』（NHKブックス、日本放送出版協会）刊行。

国立歴史民俗博物館運営協議委員。（昭和62年）

北海道立文書館運営協議会員。（平成11年）

北海道大学文学部部長、同大学院文学研究科長。（昭和63年）

国立歴史民俗博物館評議員。（平成元年）

『明治維新の研究』（北海道大学図書刊行会）刊行。

明治維新史学会会長（平成8年）

北海道大学停年退官。同大学名誉教授。

札幌学院大学経済学部教授。

山口県史編さん委員会副会長、同企画委員長（平成19年）、同明治維新部会長。（平成13年）

『岩倉使節団「米欧回覧実記」』（岩波書店）刊行。

国立国文学研究資料館評議員。東京大学史料編纂所外部評価委員。

『幕末維新史の研究』（吉川弘文館）刊行。

『長州藩と明治維新』（吉川弘文館）刊行。

『小国主義―日本近代を読み直す』（岩波新書）刊行。

『顧みて、いま』（北海道大学図書刊行会）刊行。

『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店）刊行。

『明治維新と西洋文明』（岩波新書）刊行。

山口県選奨（芸術・文化・スポーツ功労）受賞。

山口県選奨（芸術・文化・スポーツ功労）受賞。

【参考文献】『顧みて、いま』（北海道大学図書刊行会／平成11年11月発行）

田中 彰